

高齢者の楽しい学び 無理をしない・無精をしない・むだをしない

私のホームページ「人生と趣味のページ」に『老いを学ぶ』と題して記事を掲載しました。臨済宗の松原泰道禅師が 100 歳のときに「生涯修行、臨終定年」ということを書かれた一文です。その中に詩人高見順の詩が引用されていました。

なにかをおれも配達しているつもりで
今日まで生きて来たのだが
人びとの心に何かを配達するのが
おれの仕事なのだが
この少年のように
ひたむきに
おれは何を配達しているだろうか



庭に咲くパンジー

この詩は、どの家庭にも新聞が配達されていたころ『新聞の日』に新聞少年（新聞を配達する少年）の労苦をたたえた詩です。若くして亡くなった高見順と同年齢だった松原泰道禅師は、この詩を紹介するとともに次のような記事を書かれています。

「私の伝道生活も 70 余年になり、年齢も 100 歳を越えて、心身共に疲れてしまいました。しかし、この『新聞少年』の詩を口ずさんで自分を励まします。今の私の心の杖となる言葉は”生涯修行” ”臨終定年”です」そして、次のように励ましてくれます。

「視聴覚が弱っても、少しでも見、聞きができる限り、学習を怠ってはならない。しかし記憶力も理解力も衰えたのに、我ながら悲しくなります。年齢を考えれば当然のことですが、暗記したい和歌や俳句は、青年時代より何倍の時間をかけて暗誦に努めます。そのお陰で、若い時より深読みができるので、人知れず喜んでいきます」

松尾芭蕉の名句、

よく見ればなづな花咲く垣根かな

なづなはペンペン草です。花草ではないから、花は少しも美しくありません。人が目にもとめないこの雑草が、咲くべき時が来れば、人が見ようが見まいが、少しも気にせずに、垣の隅にひっそりと懸命に開花しているのに感銘するのです。100 歳となった禅師は、この句をこのように解説してくれました。

<参照> 私のホームページ「樹心流情」

URL=https://jyushin-rujyo.com/shumi-new1.html#oi_wo_manabu